

アイヌ語樺太西海岸方言の-rV音節で終る動詞について

丹菊 逸治

1-1 本稿の目的

知里真志保は主として樺太東海岸方言を調査し、北海道方言で音節末にくるrのあとに、この方言では発音時に母音が挿入されると考えた。服部四郎は西海岸のライチシカ方言を調査し、問題の母音は歴史的変化として挿入された母音であると考えた。本稿では西海岸方言で語尾に「-rV音節」をもつ動詞について考察し、西海岸方言においても知里真志保の解釈があてはまることを述べる。

1-2 アイヌ語について

現在話されるアイヌ語は北海道方言と樺太方言に大別され、両方言間には語彙・文法面で違いがみられる。樺太方言内部でも西海岸と東海岸ではちがいがみられるが、各地域での十分な調査・研究は行われていない。樺太西海岸に関しては服部四郎のライチシカ方言に関する論文、村崎恭子のライチシカ方言の文法記述（『カラフトアイヌ語（文法篇）』国書刊行会1979年）、ライチシカおよびオタスフの会話・口承伝承の録音つきテキスト（『カラフトアイヌ語（資料篇）』（国書刊行会1976年）、『樺太アイヌ語口承資料1』（北海道大学1989）『樺太アイヌ語口承資料2』（横浜国立大学1995）がある（それぞれ録音資料つき）。本稿では主としてこれら村崎恭子の録音資料によった。東海岸に関しては資料が限られており、まとまった記述もない。知里真志保の「アイヌ語法研究-樺太方言を中心として-」（『樺太庁博物館報告』1942年）は文献資料以外はこの方言か明記されていないが、東海岸の方言に関する記述が多く含まれていると思われる。本稿では「西海岸方言」という場合はライチシカおよびオタスフの方言をさし、これらの方言とは異なった特徴をもつ東海岸の諸方言を「東海岸方言」としてあつかう。

2 北海道方言と樺太西海岸方言の対応について

以下に北海道方言と樺太西海岸方言の対応を示す。例をあげるさい、北海道方言に

は(H)を、樺太西海岸方言には(K)をそれぞれ直後につけて区別した。

2-1 音節構造

アイヌ語北海道方言の音節構造。

母音：i,e,a,o,u

子音：h,p,t,k,c,s,m,n,r,w,y および喉頭破裂音「ʼ」

音節構造CV,CVC (ただし、音節末にh,c,喉頭破裂音「ʼ」はたたない)

アイヌ語樺太西海岸方言の音節構造。(服部四郎「アイヌ語の音韻構造とアクセント」
『音声の研究』第13集 日本音声学会1967年 による)

母音：i,e,a,o,u

子音：h,p,t,k,c,s,m,n,r,w,y および喉頭破裂音「ʼ」

音節構造CV, CVV, CVC (ただし、音節末にp,t,k,c,r および喉頭破裂音「ʼ」はたたない)

2-2 語末子音p,t,k とhの対応

北海道方言に対応する樺太西海岸方言の単語では音節末の子音p,t,kがhに変わっている。

yap(H), yah(K) 「上陸する」

cikap(H), cikah(K) 「鳥」

'okkayo(H), 'ohkayo(K) 「男」

音節末のrに対して母音が付加されて開音節化している場合が多いが、hになる例もみられる。

'unarpe(H), 'unahpe(K) 「おばさん」

mukar(H), mukara(K) 「まさかり」

名詞の所属形、動詞の人称形などでは北海道方言同様の子音が現われる。

yap-an(H)

上陸する・私たちが (一人称複数包括形) 「私たちは上陸した」

yap-an(K)

上陸する・1pl (あるいは1sg) 「私 (たち) は上陸した」

'itah(K)

話す「彼は話した」

'itak-ahci(K)

話す・3pl 「彼らは話した」

ただし、東海岸の北部では閉音節末尾子音p,t,kが保存されているようである。

2-3 子音rと開音節rVの対応に関する服部四郎の説

北海道方言の子音rに対応して樺太西海岸方言形が開音節rVをもつとき、付加される母音は直前の音節の母音である場合がほとんどである。樺太西海岸の方言を調査した服部四郎は「北海道の方が古形を保っている」としている(服部四郎1967)。

koro(K), kor(H) 「持つ」

nukara(K), nukar(H) 「見る」

北海道方言でも音節末子音rのあとに直前の母音が弱く聞こえることがあるが、通常あくまで発音上のことであり、音韻としては母音は認められない。それに対して西海岸方言では音韻的に母音が存在し、それによってアクセント(ただし、語アクセントをもたない、「無アクセント」である)が説明される(服部四郎(1967))。知里真志保(1942)では樺太方言に語アクセントがあると解釈されており、そこではあげられている例そのものが服部四郎(1967)の記述と異なる。これはおそらく知里真志保が東海岸方言によったためと思われる(東海岸方言については現在までアクセントの記述がほとんどなされていない)。

2-4 子音rと開音節rVの対応に関する知里真志保の説

北海道方言のrと樺太方言のrVの対応について知里真志保(1942)では語末については「共時的音韻変化」の項で、語中音節末については「通時的音韻変化」の項にわけてあつまっている。

「樺太に於て、尾音に立つrは(イ)直前の母音を繰り返して開音節になるか、

(ロ) xに転化するかする」「北海道で-r又は-sに終る語中の閉音節は、樺太に於て

は、その-r又は後続音節の母音を取って開音節になる。(中略)この添加した母音の上にアクセントの頂点が引移ることもある」(ともに知里真志保1942)

3 樺太西海岸方言における2種類のrV音節

西海岸方言と東海岸方言の音韻組織はかなり異なっている可能性があり、知里真志保と服部四郎の解釈がわかれるのは自然である。しかし西海岸方言においても、本来の開音節rVと母音挿入によって開音節化したrVとの間に区別があると考えられる。北海道方言では2つの形態素間での子音交替がある。樺太西海岸方言でも同様の現象があるが、そのさい例外がかなりみられるのである。

3-1 両方言に共通する子音交替

田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』(草風館1996年)では「二つの音節の接点での子音連続の制限と音素交替」の項で北海道方言(沙流方言)の音節末の音素交替を8種あげている。音節末子音がrの場合4種、音節末子音がn,mの場合4種である。そのうち音節末子音n,mに関わる規則は樺太西海岸方言でも同様に成り立つ。以下に示す、音節末子音がrの場合についても部分的に成り立つ(樺太西海岸ではカッコ内のようなになる)。

| | |
|-------|----------|
| rt→tt | (rVt→ht) |
| rc→tc | (rVc→hc) |
| rr→nr | (rVr→nr) |
| rn→nn | (rVn→nn) |

3-2 rt→tt(rVt→ht)

村崎恭子(1979)ではrVr→nr,rVn→nnはあげられているが、rVt→ht,rVc→hcはあげられていない。樺太方言では例えば

koro teh(K)

彼は～を持つ・～して「彼は～を持って」

が*koh tehと発音される例はない。ただし、いくつかの単語内部においては次のような例

がみられる。

| | |
|---------------|--------|
| 'ohta(K) | 「～に」 |
| 'oro(K) | 「～から」 |
| 'orowa(K) | 「～から」 |
| 'utorokewa(K) | 「～の方に」 |
| 'utohtonke(K) | 「側面」 |

これらの「単語」は北海道方言ならば数語からなる表現に対応する（村崎恭子(1979)では「単語」としてあつまっている）。北海道方言の'otta(<'or ta)(H)「～の所に」'or wa(H)「～から」'orowa(H)「そこから」'ut(H)「脇」'or(H)「～の所」などを考えると、rVr→rhという交替が認められる。しかし、単語境界や生産的な語形成のさいにどこまで規則としてたてられるのか不明である。

3-3 rn→nn (rVn→nn)

文法記述である、村崎恭子(1979)では

cisekonnispa 「家の主人」 (<cise koro nispa 「家 を持つ 立派な人」)

の例があげられている。しかし同書の「資料篇」である、村崎恭子(1976)ではこの語はみられない。むしろ

reehe koro nii 「名前を持つ木」

の例がある。ほかに似た語形として'ihunkekonno 「子守歌を歌って」 cininikonno 「いやいやながら」の2例がみつかったが、このkonnoは強意を示すkanneと同じように用いられており、koro「持つ」とは解釈できない。このrVn→nnはおそらく語形成の際の規則と思われるが不明である。

3-4 rr→nr(rVn→nn)

村崎恭子1979では

kon rusuy 「持ちたい」 <koro rusuy 「持つ ～したい」

の例があげられている。この交替もおきない場合がある。ただし、kon rusuyの場合は

*koro rusuyと発音されている例はみられない。ただし他の動詞の場合には、村崎恭子（1979）では触れられていないが、助動詞rusuyが後続する場合でも実際にはこの規則が適用されない例がみられる。例が比較的多いので動詞とrusuyとの接続の例をあげる。

3-4-1 rVr →nnになっている例

koro, nukara, 'inkara。使用頻度の高い動詞であり、例が多い。これらの動詞とrusuyの組み合わせでは常に交替がおこる。

(1) hemata e-kon rusuy hii?
何を 2sg・持つ したい のか?
「何が欲しいのですか？」（村崎恭子1979）

(2) tura 'esine kotan 'ohta kayki reekoh 'an-kon rusuy-ahci yahka
そこ と同じ村で も たいそう 不定人称・持つ したい・3pl が
「その同じ村からたいそう（何人もに）嫁に欲しがられたが」（村崎恭子1976）

(3) ne'an mahpooho nukan rusuy kusu...
その 娘を 見る したい ので
「その娘を見たいので」（村崎恭子1976）

(4) 'otaka 'ene san 'inkan rusuy 'omantene tani...
浜 へ 下りる 見る したい してから 今
「浜へ下りて見たくなってとうとう……」（村崎恭子1994）

3-4-2 rVrのままの例

sinukarara, 'eere, tura, mahnuure。それぞれ一例ずつしか確認できていない。また、

sinukarara, 'eereについては音声資料がない(村崎恭子(1979))。

(5) 'orowa hosipi-hci 'ike taa 'orowa 'an-tura rusuy yahka

それから 帰る3plして 語気詞 それから 不定人称・共にいる したい が

「それから(男たちが)帰ってしまって、(女たちは)一緒にいたかったのだが」

(村崎恭子1989)

(6) horokeypo ku-mahnuure rusuy kusu

男 1sg・嫁をとらせる したい ので

「その男に私は嫁をとらせたいので」(村崎恭子1989)

(7) pooho taa 'aynu 'utah taa koore rusuy yahkayki

子供 語気詞 人間 たち 語気詞 手わたす したい のだが

「子供を男たちに渡したかったのだが」(村崎恭子1989)

(8) tara merekopo sinukarara rusuy merekopo.

あの 女性 自分を見せびらかす したい 女性

「あの女性は自分を見せびらかしたがる女性だ」(村崎恭子1976)

(9) sisaata 'eci-eere rusuy

自分の代わりに 1sg主格2sg対格・食べさせる したい

「私は自分の代わりにあなたに食べさせたい」(村崎恭子1976)

3-5 rusuy との接続による動詞の区分

以上の例で、rusuyとの接続のさいに子音交替をおこす動詞とおこさない動詞に分けると次のようになる。

(I) 交替の起るもの

koro「持つ」、nukara「～を見る」、'inkara「眺める」

また、mokoro「眠る」にはrusuy「～したい」ではなく同じ様な使われ方をするrayki「～したくてたまらない」がついたmokon raykiという形が「方言辞典」に見られる。

(II) 交替の起らないもの

sinukarara「自分を見せびらかす」、'eere「食べさせる」tura「一緒にいる」、mahnuure「嫁をとらせる」、koore「手わたす」

動詞 (I) koro, nukara, 'inkara, mokoroは北海道方言の対応形ではそれぞれkor, nukar, 'inkar, mokorである。北海道方言では子音rで終わっているため同様の交替が生じる (cf. kor rusuy→kon rusuy(H))。樺太方言ではこれらは服部四郎が新しく添加された母音とみなし、知里真志保が挿入母音とみなした母音で終わっている動詞である。

動詞 (II) のうち'eere, mahnuureはそれぞれ動詞'ee「食べる」mahnuu「嫁をとる」に使役形形成接尾辞-reのついた形である。-reは北海道方言でも同形で-reである。turaは北海道方言でもturaで同形で、これ以上分解できない。これらは北海道方言では母音終りであるため次に子音nがきても交替が起ることはない (cf. tura rusuy)。kooreはおそらく北海道方言のkore「持たせる、あげる」 (<kor「持つ」+使役形形成接尾辞-e) が対応する (ただしkorと異なりkooreは長母音を持ち、樺太方言では接尾辞-eは生産性が非常に低い)。

sinukararaはsi-nukara-yara「自らを・見る・させる」(村崎恭子1979)。この動詞価を追加する動詞接尾辞yaraは北海道方言ではyarである。これは北海道方言形と樺太方言形が一致していない。

4 使役形形成接尾辞-teの接続の仕方

樺太西海岸方言には-(y)araのほかいくつかの使役形形成接尾辞があり、それらのうち-re, -telは生産性が高いとされる(村崎恭子1979)。北海道方言では-re, -te, -eが動詞の末尾音によって①(母音またはy,w)+re、②(子音r)+e、③(その他の子音)+teのように接尾する。樺太方言では動詞末尾によって①母音+re、②子音(y,wふくむ)または

rV+teとなる(ただし村崎恭子1979によればkaasiw「手伝う」にはsikaasiwre、sikaasiwteの両方の形がある)。そして動詞末尾が-rVのときは-rVが-nに交替する。ところがこのときにrVで終わっているのに-teではなく-reが接続している例がみられる。

(ア) -teが規則通りに接続する動詞

koro「持つ」+te →konte「持たせる」
mokoro「眠る」+te →mokonte「眠らせる」
kara「作る」+te →kante「作らせる」
nukara「見る」+te →nukante「見せる」

次のような単語も同様に形成されたと推測できる。

cinupunte「立派になる」<ci-nupuru-te (cf.nupuru「立派である」)

'eymekonte「(化け物の肉片を)分け前として配分する」<'e-imeh-koro-te

koro,mokoro,kara,nukara,nupuruは北海道方言の対応形はそれぞれkor,mokor, kar,nupurである。

(イ) rVで終わっているのに-teではなく-reが接続する動詞

poro「大きい」 →porore「大きくさせる」
tuuri「伸びる」 →tuurire「伸ばす」
kira「逃げる」 →kirare「逃がす」

その他にrV-reの構成を持つのは次の2例がある。

tehsankarire「さっと手にとる」(cf.teksaykare(H)「さっと手にとる」田村すず子1996)

'eycarare「本当にしない、取り合わない」(cf.'icara「まき散らす?」)

poro,tuuri,kiraの北海道方言対応形はporo,turi,kiraである。tehsankarireはおそらくtehsankari-reと分解できる(樺太方言で北海道方言の対応形に動詞化追加接尾辞がついた形を持つものは他にも見られる)。「eycarare」は語構成が不明だが、'icara(K),cari(K)「まき散らす」と関係があるかもしれない。

5-1 樺太西海岸方言の2種のrV音節の区別

-teの接続時に子音終りあつかいになっている動詞群(ア)と、rusuyとの接続時に子音交替をおこす動詞群(イ)は北海道方言で子音rで終わっているものである。逆に母音終りあつかいになっている動詞群(イ)と動詞群(II)はyar(yara)をのぞいて北海道方言でも母音を持つ。つまり北海道方言でr/rVが区別されるように、樺太西海岸方言でも2種類のrV音節が区別されていて、片方は挿入母音によって形成された開音節である。(I)

(ア)の方は基底形では子音終りすなわち/kor/, /nukar/, /mokor/であり(II)(イ)の方は基底形でも母音終りの/tura/, /eere/ および/poro/, /tuuri/であると考えられる。

そして使役形形成接尾辞の接続規則Cr→Ct、rt→nt、あるいは助動詞rusuy, raykiの接続規則rr→nrが適用されたのち(I)(ア)に母音が挿入される。挿入母音は直前の母音がそのまま引き写されたものである。

CV₁r→CV₁rV₂: V₁=V₂

5-2 反例

hecire「踊る、遊ぶ」に対しe-hecinte「そこで遊ばせる」という派生形が一例ある(村崎恭子1989)。-V₁rV₂(V₁≠V₂)という語尾で-teと接続している例は今のところこれしかない。しかもhecireは北海道宗谷方言形でhecireであるが、八雲方言形はheciri(服部四郎編『アイヌ語方言辞典』岩波書店1964年)であり、樺太東海岸方言形はheciriである。

6 人称接辞-ahciの接続

主格あるいは対格が3人称複数るときあらわれる人称接辞-ahciは動詞の語末が子音ならば-ahci、母音ならば-hciという形で接尾する。

cis「泣く」→cis-ahci「彼らは泣いた」

'itah「話す」→'itak-ahci「彼らは話した」

tura「共にいる、連れる」→tura-hci「彼は彼らを(彼らは彼を)連れて行った」

'ariki「来る(複数形)」→'ariki-hci「彼らは来た」

-rVには母音と同様-hciが接尾する。(注)

koro-hci

mokoro-hci

したがって-ahciが接尾するのは母音が挿入された後であると考えられる。つまりrusuyは人称接辞-ahciよりも動詞との結びつきが強い可能性がある。そもそも動詞とrusuyの間には他の単語が入らないが、-ahciの接尾の仕方からもその可能性が考えられる。村崎恭子1979では「rusuyは人称接辞が決してつかない」とされているが、-ahciだけはつく。

(10)Rayciska 'onne ne'an reekoh tumikoro 'e'ariki rusuy-ahci manuu.

ライチシカ村 に あの とても 戦争 をしに来る したい3pl そうだ

「彼らはライチシカ村にととても戦争をしに来たがっていたそうだ」

村崎恭子1979の記述からみて「-ahci以外の人称接辞がrusuyにつかない」ということだとすると動詞とrusuyの間に入りうる人称接辞は-yan, -ahciだけであるが、資料にはそのような例は見られない。つまり、rusuyは助動詞ではなく接尾辞である可能性がある。

7 まとめ

樺太西海岸方言の動詞で語末にrV音節をもつものは、いわゆる助動詞のrusuyとの間の音韻交替の有無、接尾辞-te(-re)の接続の仕方によって2種類に分かれる。それらは片方が挿入母音によって形成された開音節であるとして説明できる。それぞれの規則は以下の順に適用される。

- ①rusuyや使役形形成接尾辞-teの接続
- ②母音挿入
- ③人稱接辞接続

(注) 古川恭子(村崎恭子)「アイヌ語カラフトライチシカ方言シンタクス」

(『言語研究』第49号日本言語学会1966年)ではrVについて「V=/u/なら/-Vhci/→/-ahci/の傾向がある」としてkonupuru「好きだ」→konupurahciの例をあげてい

る。じっさい、村崎恭子(1976)ではyaykonopuruのみyaykonopur-ahciと発音されている。しかし村崎恭子(1989)(1994)の話者(オタスフ出身)の発音はyaykonopuru-hciである。二人だけしか今のところ例が無いので、これが方言差なのか個人差なのかははっきりしない。

引用文献

田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館1996年

知里真志保「アイヌ語法研究-樺太方言を中心として-」

『知里真志保著作集』第3巻平凡社1993年第5刷（1973年第1刷）（初出『樺太庁博物館報告』第4巻1942年

服部四郎「アイヌ語の音韻構造とアクセント」

『音声の研究』第13集日本音声学会1967年

服部四郎編『アイヌ語方言辞典』岩波書店1981年第2刷（1964年第1刷）

古川恭子（村崎恭子）「アイヌ語カラフトライチシカ方言シンタクス」

（『言語研究』第49号日本言語学会1966年）

村崎恭子『カラフトアイヌ語（資料篇）』国書刊行会1976年（カセットテープつき）

村崎恭子『カラフトアイヌ語（文法篇）』国書刊行会1979年

村崎恭子『樺太アイヌ語口承資料1』（カセットテープつき）

（1988年度科学研究費補助金研究成果報告書）北海道大学1989年

村崎恭子『樺太アイヌ語口承資料2』（カセットテープつき）

（1994年度科学研究費補助金研究成果報告書）横浜国立大学1995年